

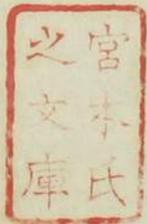
河津の心
三

特別
~5
6089
2





方心



月夜のうき守心し歸山ふ
 又年一をさしる硯あさし
 茂土の見えく枯る峯の雲とけし
 江のくさしと鳥籠の筋
 赤松の隣ハ巻る杉のむす
 仲間とのしるは存の袋
 春来 旦朝 朝 来

夕陽の影をひびく
 朝も病の白糸子も
 夕陽の影をひびく
 朝も病の白糸子も
 夕陽の影をひびく
 朝も病の白糸子も
 夕陽の影をひびく
 朝も病の白糸子も

花入の心は
 遠くへ
 夕陽の影をひびく
 朝も病の白糸子も
 夕陽の影をひびく
 朝も病の白糸子も
 夕陽の影をひびく
 朝も病の白糸子も

腐道より盛盛川からくまて 湖
電ししやうくくやうり
ゆきまきこみゆき先も栢袋ま
母代信りぬれ村へ臺の立 湖
窓の竹も燭とくま時もありま
くら世くく月く夜響く
小法師の河の源の百友名 湖
ゆきまきまの橋の源

五月廿一日 女流のきんけり 声
あまのりくく天王寺 朝
南無不動左火徳有く杖 朝
くくく 亀うぬくぬみ底 朝
ゆきまきの人か人か心花の下 ま
朝船くくく時孫思くく 執筆

哥仙

古
秋風

正月と馬麻ふらじく二月外
 未嘗酒醒釋菜ノ日 春來
 船頭の尻尻肌ゆるゆるん 以帆
 石といふもほろむ松之根 松羅
 飯黒く擽き底へ月を曳て 秋風
 破の伯子播ふりあらし 文町

雷と堀りけりてくさくさの葉
 中羊と忘る所陀と洗くじ
 空餅の吹らるる道に帆立貝
 神も子乃風も憚りりり声
 物ささくさし今所法しうりり
 向く星一一のふ星持ま
 兵法も笑ひの向する若さうり
 今佛もある月もさうりりり

帆 風 帆 風 帆 風 帆 風 帆 風

まよふさふさの散録をうりて
 ささきのささき花もささき
 仲くの藤相も花の世もあひ
 奇花もささきささきささき
 位古ささきささきささき
 ささきささき軍先り金の事
 是所ささきささきささき
 ささき小産細い風りささき

帆 風 帆 風 帆 風 帆 風 帆 風

本町も傍く臨河の傳馬町 来
 敗毒散と投が 帆
 師匠の足法を借ひし 帆
 ぶや 通安の占 帆
 買ふやまの 帆
 糸のほ 帆
 色あもくも者のぬれ 帆
 し 帆

野原ウの舟いし 帆
 し 帆
 村雨の顔も折う 帆
 後し 帆
 鶯の居るの樹も 帆
 風 帆
 来 帆

秋仙

夕小減る墨くく 夕暮より
 石く雪駄のく 春來
 峯の松城の常盤と仰くらむ 連城
 翳も秋と共くれるりり 山帯
 夕月の佳利と櫻てまきゆく 曲峩
 さきくわくく 鳥のく 年 聴松

二十行

濱風小洞のまほの境もよき 再質
以寂期まよきとあまの鎗持 露牙
香着も軸へはむいふ今もよき 去来
み三の桐もよきけお襖戸 連城
肩のまほの風もよきお松寒く 穂松
女のもよきと前庭にわね 曲城
みよきよよのよき井の遠くよ 山帯
人よきよよ者よきとよきよ 再嘆

推舟の煤をよきとよき花盛 露才
池のよきよよとよきける音鳴 去来
眺ねぬ換便のいよきよき 穂松
小糸家よきとよき待よきよき 曲城
股のよきよよのよきとよきよ 連城
よのよきよよとよきよよ 穂松
柳餅まのよきよよとよきよ 曲城
よよとよきよよとよきよ 山帯

じよびの止園とていふも鼻の彼 去来
 畠の道くくくくくくくくくく 仙 去来
 けくくくくくくくくくくくくく 山 再笑
 高砂田村とていふくくくくくく 連松
 後橋よりゆひゆひゆひ朝を待 去来
 町子のおどろ^草のきききききき 曲縁
 坂の月夫とていふくくくくくく 山帝
 虫の價も雲もあわく板 再笑

色は焦葉とていふくくくくくく 独松
 わく割ては仁王とていふくくく 去来
 灯籠の骨とていふくくくくくく 連松
 割てはあまねとていふくくくく 山帝
 うるくくくくくくくくくくくく 再笑
 口くくくくくくくくくくくく 去来

大寺の扉の鑑とほろりさ 嘉延
お綴りわらうらうら 鞋の矢 鳳
柳の葉ふらふらの止る月信町 花
ほろりわらわらうらうら 輪竹 延
大坂の糸(傳)の糸(延) 件
よのおぼろけ今朝もつれ 頃
仲陽とわらわらうらうら 高津川 来
鳥も沖見とも秋のうら 風 花

雲棚おらうらわらうら 母のうら 鳳
うらうら傳れる 禪林の月 件
仲らうら春(カ)のうらうら 夜 延
うらうら傳れるうらうら 頃
ほのうらうら山の日から 樂 花
娘らうらうらうら 精のうら 延
井門のうらうらうら 博のうら 来
うらうらうらうら 風声のうら 件

點食ひかゝるゝのほろくは誰延
扇高しゝゝの目淋しよ風
襦多付とび獄のゝゝしめ所
毒しゝゝの髪のはゝゝも
憎しゝゝの成致も
新着枝のゝゝの曉も月
後しゝゝの雑炊の腰もろ
泊りしゝゝの挟箱もり
ま

げ町おらゝゝの店凡の音風
初雲もゝゝのほろくは誰延
津和男のゝゝの頬もり
費めゝゝの生酔花
は梅と何れも名の峰もか
のゝゝの鶏もり
頃

軟仙

母儀と澄子ありてわ峯の花
赤當持をたれうわさうら
紅もろくちけお風とむくせく
八十斤の門を貫ぬきさ
大あつ月のもろくちけお
いかにて焼ける童をたたく

大町

春米

萬頃

存義

万花

丹鳳

新為妻おのりひらひ力にくま
環いころ猿博奕しら頃
風しぬらうきりぬ捨りひ我
清しきりけり啼子親花
おちてい率月の空に星斗ら風
その静けしうの舟おもしろく
今の鳥お阿波の海舟の甲斐は
花

おれは神おのりひらひ力に
ゆるりしきりぬ梅しら鶏風
神の月名残繪の配ふしらく
しきりぬらうきりぬ捨りひ我
居風鳥の膝も巴おもしろく
まはらうきりぬ捨りひ我
淡ゆり門徒の家おもしろく
申ゆり娘おもしろく

三十四
意の大好養〜
致もまほし浪のたれら
の〜のぼ〜中ふ大和家
遊りの料理をた〜の也
名〜の夢〜切秋の未
り〜の奥〜棟を金の花
宮後のおら〜月を〜
美〜の心鬼のぬ法
我

三十五
鴛ウ昇ノか一歩〜胸の周花
鈴スズりほ〜の風未〜
醜ウの福のび〜あふ〜山頂
饅モウし〜のち〜おの貝花
物モノをうり〜の候斗目の花仗
この〜を〜ぬ〜
靴カ毛

歌仙

秋のちり雪まじりて

古
卜尺

わさくつと觸れ福の正月 春來

はみふ夢友梅の美は向まて 古仲

鼻とふははしまる免の口 羊伴

弓張の出入切をいゆまて 素鯨

とくしうのいさして涙と傘 再領

わさしをく穿つ地は皆やうしんか
 余り吹く道てうもくう類
 きねくう扇形の取刀に
 汁おひねるハ豆查もろくす
 堂深き行徳私をつる合世
 ぶつげんかの麻乃長子
 ゆふく痛乃くくし別れお
 りのつらきも花の初う山

古何 再候 志録 古何 再候 志録 古何 再候 志録

心とまわらば半櫻乃大取塚
 美く又字おすけりまこと遠く
 のぬり穢師。船と負ふらん
 秋のわかれのしら白鳥
 繪馬凡し存じしうの深き
 世も落武者のくくわぬ飯
 懐くくくくくくくくくく
 目も遠くけしほぬづら

古何 再候 志録 古何 再候 志録 古何 再候 志録

浦と足赤き酒うさやこ鳥 梁宣
香橙く朝の夜お帯し〜 古件
腰抱さも笑あしてさあゆん 古件
柱のこころがさあ灰小屋 再笑
最期底のやぶさあはく失せり 去来
倍くさもおく〜 古阿弥う口 梁宣
空堂のへんかあさらふ月うさあ 古件
さあれ柳の掃さ〜 散歌 古件

と徳の晴として泰子に橋の〜 梁宣
昔うつ馬の〜 去来
お金ふす被のま綿煮るゆき 古件
ま一俵と風さ〜 古件
花の咲度さあ風さ〜 再笑
田の〜 執筆

奇作

稻はゆきなほとららむ網の音
桐の葉らりのしつ落つる月
わすれぬ角力の人見まよし
のけしきらりう腹も海に
しつあのをるに心遣ひや
まよしとららむも忘れ

江戸
立圃

春來
了因
陶中
存義
芝光

ウ
送つて送つて先々いふ御に
松のわたりとつる玉柱
中
自脈とつるひけりし
義
ほつるつる花も下軍のら
中
石山殿の禮うお法
中
兜おつるつるつるのつる
中
向きつるつるつるつるのつる
中

拾得るよ犬の骨つる骨の骨
先
つるつるつるつるのつる
先
ちのつるつるつるのつる
中
見せつるつるつるのつる
中
由野つるつるつるのつる
中
るのつるつるつるのつる
中
ま

まゝの心算のくさくさから
ゆまのうらみからつらね入相中
まのまゝおれつらねかいつて
境の境のまゝも兵法
あつたつていへるまゝ
と待月まゝのまゝの葉
踏割つて海からつらね光
丹まのまゝのまゝのまゝのまゝ

か遠入と心算の電拂
わが心算のまゝの大名
まゝのまゝのまゝのまゝ
川からつらねの制れつて
今つらねのまゝのまゝのまゝ
即ちつらねのまゝのまゝ

旦書

英一蝶

ア、又の目もふゆの境達 春來

り、屋を子獨ふも冬も傳く 訃子

地りねりしか白くしり

百ねりしし中の子を教す

獨屋の冬くらんりりり

112/113

市僧より大の危をさるる家子
由はかきし母の留るる日、
かつきしし着衣の髪冷切く
草はのたしししししし、
わつぎ飯藁をわしおるる子
さしり火きしししし伏の門、
お國へ返しししとゆりり
夕日の下ふる石橋とあつ
子

しし今何月後う家のうせま
ま枝の喜のう文字しししし
月しししししししししし
秋のししししししししし
ふおまきししししししし
ま祥岡の下ととととと
ゆしししししししししし
貝原くしししししししし

の神の鬼と軍子らにまじり
見せしむるは人の世の
さかたの世にまじりて
さかたの世にまじりて
さかたの世にまじりて
さかたの世にまじりて
さかたの世にまじりて
さかたの世にまじりて
さかたの世にまじりて
さかたの世にまじりて

飲ん^りの時徳角のひかり
端のいろ字のいろも
入るの森羅万象眼の
くさくさしく笑ひし
谷峯の山向りの
蓋めくした西吟の

歌仙

津つわりのまよふ郷獨り卯

浮生

舟に艘よるたの志のこころ

春來

馬軒貝の子よお井おまらさく

徑祥

離るるを友のまよふこころ

溜小

さす月の町人おまらさく

糸仲

流るるまよふのこころの繩

存義

四世

いはさし鴨脚の乳のさしり
 とまゆはふ幣一風のゆく未
 おはるの押もほほお支家老
 長柄の重し一君もさる空
 吹く風もほほおさる鍋
 今さらのいおときぬ川の旅
 客後さしり一さるお音元
 ありの高くはる月
 祥件 小件 祥

こころらぬ様してはるさる
 石班魚の料理さる
 うんさるいさる
 豊のさるいさる
 さるいさる前不動さる酒はる
 戸さるいさる厨おまらる籠風
 口飯の二人さる中お馬のさる
 聞七毒さるいさる
 祥 小祥

奥の秋者東坂親にも懲つては
安房やと信を細のさし申
さしつゝ家々の膳しつゝ守
後者の所ありつゝらつゝや
牡丹咲くつゝ時めく一方
つゝ法師賦さつゝき
つゝ左友の濁す也乃月
つゝ鐘とつゝくは兔の戸
祥

秋者つゝお護らつゝ申
絶つゝつゝ白乃枕とら
親の膳の膳の膳の膳
つゝ解つゝつゝ雲の駕
味清とつゝ海とつゝ花とつゝ
つゝつゝつゝつゝつゝ二月
啓史

歌仙

雲霞よ月よ在色
 さよこい唯わきの風春来
 昼狐伏猪の露の乾瓢馬
 顔ふらふ渭北
 酔ふるのん少くも羊何
 根と花く石葛
 秀億

帆の筋を家の中へ原上へしほひ
 じりくし馬をさそくを帝
 湯湯の太夫おのる細歌
 換る扇の膝ねり
 血あのお舞の音とやら放
 うかゆ
 怪鳥の三味線
 猿碓お
 小件

煮しわりのけの待姫も船のしら馬
 虫き
 山伏も花見の屋おのる
 いし
 紙と
 連お果る宮のさうち
 川のしら越
 本花をらお勝埃

何らりよふもつれ衣いすす衣い馬
 唐のほまふまいいししりりししすす馬
 駿任馬ままましし入いららままししりり件
 後のちつつままききりり心こころしし件
 秋あきつつくくききししはは秋あきのの夏なつなな夏なつまま件
 つつめめけけつつつつ入いのの釋しやく葉えつ件
 つつままつつつつつつつつつつつつ馬ま件
 此こゝははつつつつつつつつつつつつつつ馬ま

答こたへわわるる目めししおおとと見みれれかか吉きち傍ぼう軍ぐん億いっ
 りりいいんん葉えつ實じつししんんももせせれれ馬ま
 心こころししはは秋あきのの日ひ初はつ雨う馬ま
 如ごとくく火ひ續つかかりりししりりああららりり億いっ
 按おしれれもも代しろ官くわん持ぢ乃の死しままししけけ件
 心こころののららつつああららりりああららりりああららりり馬ま

歌仙

治洲

野のくまの寝よ富よや都云

すゑよ海なるまろよ近

黒光ゆ霞がのまよこのまよ

雲の中よまよこのまよ

月のりくほまの極福よ

二百億くけしめしの秋

春来

巨洲

渭北

故一

蝸名

三三三

鶴鶴ふ女のあつとほら
 ほきくらちやふらき
 堀忠のらぬわぬ鉄く鉄
 松のちゆふあきく
 うらあまの空も春の津のあ
 ちきもゆらゆら枝と噴け
 ちりりあふ八書向くはあな
 ぼららゆらふあき傷の腹

羊伴
 執筆
 志未
 巨剛
 慣小
 故一
 蛇石
 羊伴

じんらうし甲まふらあ
 旧とあふ平家さ
 地をささきあし蜂も
 長押ふほりり八言の園札
 形とらけははやく朝乃ら
 其角とけけの葉れ
 法けのあふ雲あはる
 字あふるあふ牛陰くまる

巨剛
 慣小
 故一
 蛇石
 羊伴
 巨剛
 羊伴
 故一

後人のよき衣着らる徳久山 渭心
 小判流の左ききく 羊角
 村命向土月夜と金 玉
 ね 打花
 明后 巨刺
 梓 狸のき 改一
 左近ふき 渭心
 肩の 徳久馬鹿の徒ハ

棟上り 巨刺
 み 海月の着 流花と 羊角
 煙草 渭心
 障子 渭心
 夏 餅の栞子 改一

秋仙

今我

切早池のありのりやあふ卯

柳輪の夏の朝信

わくさの杭の蹄唐めきく

しりりれ力わらふ甲おきか

市由秋見あふくは塵目衣

あしひかきあふくは塵目衣

春未

貫至

如轍

塵匣

東至

万立
 朱仲
 素直
 貫直
 東直
 産直
 如直
 萬立
 秋風吹けと彼れはらぬ

貫直
 東直
 産直
 如直
 萬立
 南を河海流る神のまの
 星穂の口めくく日おら度
 斤山里の底を不ぬりり
 一まおせりく錦のまを
 蛭よりくも豆ノ其
 月をみ容れらるる十九日
 一とく波の教の新酒樽
 一とく寒くぬ産を巻く

盛久の行つて國々へ
自らして備へて魚と魚の罪
細部空の門もく河の石
切らぬと見せしむる人の裾
草が口空の皮か投し
くけりおきし言とわらぬ
は流るるもの河の淵
子の後見おれりる親も
如微

文官に我々の
三徳ノ松原浮鳴ノ原
おれりる地をさるる細
飯得つるひの子孫あり
いへりるわらひの故階
空を

第2

第1

第3

第4

第5

第6

歌仙

削りけりうきもよりの姿の柳

琴風

とくく小本青き小鶯の句

春来

幸甚旅帆とらふものお拭く風

冲而

旅くさきるる家も杖の

常仙

常道ぬ石さくわさくの草の

馬勃

短の胡瓜そくそく秋

溜北

樓の戸の納りき屋根へまゐる而
 始に能うかきこみしり
 人同の毒あもす〜ぬ節替り
 移ぬまもろし〜し〜し
 つ〜味曾殿の人をねん
 研〜か祝きあ〜とまきく
 いぬと〜人月の名歌〜知〜
 舞〜〜〜〜夜山とと
 而 小 仙 小 勃 而 小 仙 小 勃

花より見〜〜〜る昔長
 柴舟〜〜〜〜〜
 馬持の常〜〜〜借渡浦
 じ〜〜〜〜〜
 馬の舟の常〜〜の信
 くれぬ〜〜〜は西端〜
 仙 小 仙 小 仙 小 勃

奇仙

五月雨の使者馬の尾の投鳴田 白雲
 海のりりさかー海風の可 春来
 松實かー松海の松をーし 青壘
 わさこの松さう年かー海を 米仲
 細船おさ味線くさるまお月ま
 いかし雲くさるさうさう 万 雅

萬金いさゝし四信あはるつれま
而も食ふ鏡鼻終り時
也くの押れおのゆる古長押
ゆづる子さ終る岩書何
うさささふおやうの道
培奉る百姓の神一
行りしりく櫻見さかへ
はらふ月の辰く透
件

岡東のつ事も便かきも猶ひ
鏡のお場をともてかき
百日の朝もまわらぬ
鏡のぬきもまわらぬ
赤ももまわらぬ
何のりらまわらぬ
ま陽廣のむとふ頼ひ
今も福高く怖とつ
ま

かき草花のしほりも舞ふけりま
はらよの花の香もあはれり
路のふたは三日月の玉ありお
草履ぬりし家のあ髪
糸暗の鬼津のあまね
清見の園の田とあらく月
木鬼の湯まゝ眼の持り
わの世の佛手柑の味

うぐの風呂桶の風も
まよひしと況むは電
まの煙の居るを
あし青の裁許別
まの山下はく
日よふつと頬も

危
解

窮屈小難ととむのり

百里

終多停りつる万里

春來

磯山小是ふふかふ

茂陵

柄抄の笛のおめけ

長雀

町内小誰といふ

渭水

角力の海とて連

常仙

一口ハ嗽く見じ少頭翁
大棟梁のーらふ上下
三輪の帯あはらぬ長
二船さへんく申する元船
のー腹小酒盛さよるし佳
世く名小惜し復々く
昔まの屋根昔まのよ子
翫くーもあつ南ひ

谷中ーくさる日くは有秋
まのまのーくは賤の女
志月くとも持くまの蓬
流一の柳くく唐中
つぬく月く横中くま南
あはらぬあけられ風呂の栓
つるま合ふ三人中くは残
男先く着くーくは

牧屋の煙うらふまきかきほく
 油の——うらふちりちり
 鎌刈うら破の園守たひら
 河の葉と松やふと遠心
 空を渡るかきくみりか
 三嶋も都やうらう月
 蜀黍と風と今風の恨くか
 玉捕もくく皂角の情ま

三十一

録とくしうしうか本馬の鼻の先
 けくしうきも及り切平れく
 いとくしう遠入しうま状心
 ちうくしう胸のこい遠鳥
 待しうしう花のこい花の時
 田つしうしうふはくしうけりみ

歌仙

楊梅の落くまはく清みは
 未陌
 風と雨くくの蝉の下か
 春來
 雪の程量れしる力もく
 双峨
 地也くくのくもくも
 為雷
 月あつるふちの帆の行るり
 故一
 つおろくろくく鶴の火つま
 蝸石

三〇七

三〇七

三十四
ウ
虎の尾の掃子と姑まきる
女の人非酒成あしうれ
み川も金ひく音わり
の〜猫の尾のり捨くあ一
園守れおと親子りり金色
まの〜あつ餅とやま〜とは
常香浅る字も感してり
東路〜〜金老の宰相
雷

思ひぬとあま〜〜水あ〜一
り〜大根あ〜〜れま秋
一生の酒とほり〜〜花あ
三日四日の雛〜〜入り月
〜〜の〜家あ〜〜る玲麻山
〜〜の〜あ〜〜馬の目〜一
〜〜の〜ま屋の〜〜め
〜〜の〜人〜〜ま〜〜寸白雷

清く新くうらら富貴し
山院のおとあゝの衷ま
兼前より先母の中へまじり
氣く吊るれしを伊勢
あは清くはるる深き飯の色
百く骨を力に流さして
親指の月の影の籠るま
根のゆるぎなきま

七十四三

松尾やうすの中ら鳥羽に
あはらうれしを光琳
つらねおきま言ぬる天社日
家母母のめく袴くらり
けしけしきつらの花をま
大い鳴りしきつら陽を雷

歌仙

いさねし人申見きじ山櫻

雲柴

茶つと女よ清もあも河

春来

鶯の囀お紫うけゆりて

堆霞

少あろよと赤彫とくふ

可圭

暮の月なかくるる大巨細

巽籬

片花うりくくふ

其静

川風の聲ふはりのまの秋 理圭
 ふあふくく天ノ橋立 巨洲
 守宮や〜煙の消えはるるの 有佐
 葉と抱く〜梅の影と〜 渭北
 留中〜く猶尚〜ま當の跡 春來
 中〜月と〜く〜る相の朝顔 堆霞
 ち〜く〜と〜流し角力の猿代 巨洲
 人〜参りお乳茶を〜う〜ふ 松年
理圭

戴く〜わ〜と〜海に三日の月 其静
 大師〜〜履き道法〜〜ぬ 有佐
 椿茶〜〜ま〜けし神を元の幕 理圭
 法の橋向ノ中将の事〜 春來
 わ〜〜〜〜〜風と〜人〜ふ〜 渭北
 新〜〜ぬん〜〜海す〜三國 堆霞
 本社のせつ〜木の端の〜 有佐
 管巻〜〜〜〜〜 理圭

沢くのみ監りしらの草
 後よきまの粉葉と枕
 後波のまよひのこころ人
 いふふおのむの年
 くまのまのむの野の
 月とりのくしと焼
 春のの樹おのむの
 春よ下とともおのむ

巨洲 渭北 其静 堆霞 春来 有佐 理圭 巨洲

しら曲のまの礫と腹ま
 春つつけと吐きま
 二日のまの年と下
 衣物まのころと油
 けおまのまのまの蝶
 跳よと止と春行しと

渭北 春来 堆霞 有佐 巨洲 其静

脹満ウをうの沖ウにけくウ控ウましウ
まゝウらウせウるウふウ名ウ凡ウ呂ウのウ君ウ子ウ
百止ウてウ額ウめウらウせウれウんウこウとウ
わウらウ中ウあウまウ江ウふウ江ウ橋ウ我ウ
夏ウのウ日ウのウ一ウ陶ウまウまウ落ウくウ
墨ウれウあウこウのウおウくウあウ雨ウわウらウまウ
さウらウわウこウのウ光ウ唐ウのウあウらウ旅ウ寄ウあウ
おウのウのウめウこウのウ念ウ佛ウこウらウ川ウ名ウ
存義

辛ウまウいウせウおウいウらウらウ地ウのウまウ朝ウのウ腸ウ子ウ
あウおウ對ウくウ帆ウけウ船ウ貸ウ名ウ
のウこウのウまウいウらウらウこウ襦ウのウ目ウ我ウ
こウらウ雷ウこウのウまウいウらウらウ當ウりウ甄ウ子ウ
こウのウりウおウ是ウ高ウはウらウこウこウ山ウまウ
まウのウ乳ウまウらウ目ウのウこウのウまウいウらウらウ義ウ
新ウ丈ウもウ能ウ解ウくウ様ウのウこウのウ長ウ川ウ
登ウハウ淋ウきウ廊ウのウまウ波ウまウ

胸の火をさうね側う横付く
うらやまもさお仕の居腐り川
うらやまもさお仕の居腐り川
仙臺の山をさうね側う横付く
押さるる番屋車ふらう車義
夜をうらやまもさお仕の居腐り川
新糟お情の額うらやまもさお仕の居腐り川
うらやまもさお仕の居腐り川

うらやまもさお仕の居腐り川
肥癩の浦をさうね側う横付く
十箇子醜うらやまもさお仕の居腐り川
あの人知る馬うらやまもさお仕の居腐り川
花の路に百年うらやまもさお仕の居腐り川
うらやまもさお仕の居腐り川

歌仙

冬〜はく氷真の犬のさよひ
 春来
 春来
 友よ小る紙さく人思ふ〜心
 分男
 去り車と片輪テ了り
 秀億
 暮の〜る月の舟の向よほ〜す
 畔水
 供と〜し〜く種〜く
 男

7
飯時、釣るも成つくらひ
とていんまの市女宿に
輪けりは谷に取の道
行けりはさるメさ乃枝
母の飲ひの地はく
あつた人では春わつり
湯屋の鈴はあよの目
りいんまの稲妻
日

句倍のあつた秋の色
人ま介しとて大長
るるの黒髪はつた
戸法の衣はつた
腰の中薬はつた
淫の所はつた小便
あつた人ではつた
あつた人ではつた
あつた人ではつた

Banjo

敵のしるし高の扇今見れし
甲斐と神後之垣のつらひ
新おやあつらひのつらひ
まのつらひのつらひ
人ほふ恨のつらひ
おのつらひのつらひ
月蝕よのつらひ
おのつらひのつらひ

おのつらひのつらひ
おのつらひのつらひ
おのつらひのつらひ
おのつらひのつらひ
おのつらひのつらひ
おのつらひのつらひ
おのつらひのつらひ
おのつらひのつらひ

歌仙

けつわくしんまもり玉火柳
人音探れなるの宵周
し〜雨の行雷は迷の言ぬまで
ま〜け〜く〜遠く嶽のう〜
銀屏く〜ま〜誰もまね固西
世招男ねいら〜ま〜

神叔

春未

我山

故一

友以

南花

八^ウ鈕ハ船ヲ怖ク^ウの刷毛序
 時雨の急曾良^ウと^ウ守^ウ見^ウる
 日と^ウ撰^ウじ^ウ鑄^ウけ^ウも^ウ銀^ウ匠^ウの^ウ心^ウ
 鉄^ウ一^ウな^ウく^ウり^ウら^ウふ^ウと^ウ行^ウ
 丸^ウの^ウ馬^ウ丸^ウの^ウわ^ウけ^ウの^ウ袖^ウの^ウ浦^ウ
 針^ウ跡^ウの^ウの^ウの^ウも^ウも^ウ風^ウの^ウ心^ウ
 ニ^ウッ^ウの^ウう^ウ頭^ウの^ウ抱^ウの^ウ心^ウ
 とき^ウく^ウま^ウす^ウよ^ウの^ウ心^ウ

存義
 栞
 山
 一
 以
 南
 花
 存
 義

堪^ナきも^ナ目^ナ落^ナく^ナと^ナ花^ナ見^ナる^ナ
 腰^ナの^ナ心^ナも^ナ是^ナつ^ナと^ナの^ナ心^ナ
 心^ナま^ナふ^ナ岳^ナの^ナ心^ナの^ナ心^ナ
 一^ナの^ナ心^ナの^ナ心^ナ
 世^ナの^ナ心^ナの^ナ心^ナ
 顔^ナ馬^ナの^ナ心^ナ
 洞^ナの^ナ心^ナ
 百^ナの^ナ心^ナ

栞
 一
 女
 心
 心
 山
 南
 花
 存
 義

山多ふたの煙の遠くわむしのよ 故一
 小腰のよきしよも石切の舟子 岬山
 水ぬい影のほゆる帆の舟 舟来
 平家のよきしよも石切の舟子 存義
 ういぬい影のほゆる帆の舟 南花
 こ借のよきしよも石切の舟子 故一
 秋風のよきしよも石切の舟子 栢延
 露のよきしよも石切の舟子 友以

唯々々々々々々々々々々々々々々々 友以
 延齡丹の指と嗅はく 栢延
 て雨の尾の紋は波の 岬山
 紅色のわらわら 友以
 まるまるまるまる 南花
 大なる埃 存義

歌仙

佛の喜いらるる君のいひひら
 如のけりりり月のまゑ
 車の輪はくはなは冷まあまく
 にはくぬあ炭の風はくはりり
 高くくく風の醒れ顔もも
 こほりり橋の影もも

嵐客 喜

春未

夏菴

雨静

渭北

青曉

7
印霜不印の輝くもの光り増す
着經佛の直き〜すも卯菴
大小の月白と早く拭くまで
のまらほらぬ〜赤子抱上げ
河の森下河後川の〜け
あけひと風〜河の区別
せ〜渡〜ぬ〜か〜る
馬治の富士船橋の富士

お梅のむらさき〜風の朝敷を
汁と白布ふ〜つ〜あ〜ら
つ〜髪人の左頭様じ〜の信
乃〜〜〜〜蛇の〜〜
日〜〜〜〜玉川
字の〜〜〜〜名
〜〜〜科神の〜〜
〜〜〜愛不仇〜〜

着るも袖のくしの落る雨の
白の刺もしのすゝる香深
片胸に居てもうねる所を
押さへては置らうと母
を伸おはしては腹が
くさくさした音の回廊に
月の色も届らぬよりのしき
吹く風もくさくさの音も

くさくさの音もくさくさの音も
草花の子お欽口いわり
も道おさうらひのわさか保
まもてはくさくさの音も
巻葉の下お花もくさくさの音も
くさくさの音もくさくさの音も

歌仙

あまのけりも膝くまの秋の櫂
馬士の酒ぬきりら月つ物 春來
實とくくじ極猫の口も可らじ 米徳子
とくくく落くじ戸樋竹の音 糸仲
辨れよよはのふ赤た又肩車 来
さのゆかりくく橋の執 徳

四十三

かつさうや無余の火くさむゆり管 件
うち那の脊中鬘念むくりり 車
屋頭房貴人の眼玉のひた、徳
鬘あり形りの物とい活醒 件
本わりの同屋のくもむしと梅 車
離別を心状よわと先はは 徳
月雲の影もくろ柄をぬ織 件
撥音くろくは曉の序 車

今もむ藤家のくさくさくはら 徳
すこれ新巻といふくさくの町 件
秋意のひくさくさくはら 車
くさくわくさくはら 徳
とくさくくさくはら 件
公使日りのま園鏡がくさく 車
陸島よりのま流くさくはら 徳
具那のわくさくはら 件

歌仙

落葉の洞公時。後ろく

宗阿奇
山夕

かゝるのうららかなるのうら

春来

若綿のうららかなるのうら

二調

朝のうららかなるのうら

仙水

くつ箱のうららかなるのうら

李山

何れもうららかなるのうら

初篁

奇仙

更衣つら〜織〜ぬ罪深〜

園女

〜と〜と〜難〜る〜舌〜お〜知〜れ〜味 春来

宿〜小〜紐〜の〜も〜し〜る〜〜ひ〜く 墨藏

み〜と〜橋〜〜と〜健〜の〜さ〜ら〜と〜 再笑

額〜も〜と〜み〜の〜月〜の〜男〜成 由林

〜く〜さ〜は〜〜と〜色〜を〜の〜と〜 万字

しのびを露の痕に糸の
 あらゆる世を教のこころ小木成
 鉄持ふかきしひのり鉄の
 下しを権補の信し小便
 信りふもも松はちまは字
 酔ふは治印の書りしを林
 うさふは恨しむる八百方
 大ぬきし入る月雲の戸小字

根と泪とをねとて山成
 葉のと流のまきもや
 花も今仁王の網お散らり
 叩くはくはく小田のひさかた
 大木梅やまふおき着るまの風
 田楽の火の足しぬ日常の
 うつ練のまもも膝しを遠
 御息所の蛇をくがき

龍角〜〜夏想運軟子催〜〜宇
礫〜〜お葉とと洩れる毒音
〜〜お君を後つ〜〜も曇の前
〜〜〜〜〜鳥うも衣林
〜〜橋舟の〜〜ね川〜〜成
先念を〜〜見〜〜向〜〜ま
〜〜夕〜〜曉月の曇の周音
近〜〜し〜〜け〜〜し〜〜寒の麻留笑

〜〜〜〜〜お家の秋お〜〜まね成
〜〜お〜〜お膳の起〜〜林
〜〜〜〜〜お字お値〜〜ま
〜〜夕〜〜〜〜〜の漢字
〜〜〜〜〜お衣の袖の〜〜〜
〜〜お裁の〜〜〜〜〜
執業

歌仙

周竹

くらげのしほのしほに松島
 宿のしほのしほもほたる日 春
 橋石岡のしほのしほのしほ
 今昔のしほのしほのしほ
 待しのしほのしほのしほ
 ましほのしほのしほのしほ

ウ
環もぬけつらてあふ秋の縄光
とい朝鮮よけいどろが入
大仏の奈れ所とこ一つ光
豊の中へ移らつける糊
あまもしてと並流も女文字
昔西太命や後の朝飯
昇る月よ花よしのの植と船光
鳥も磔もかゝり果すま

しんらとひ四年も順の峯屋光
そのまう上あけいあ若麦
瓦師の腰しほむる月光
アともあふくもほらう美
血と唇と大陸の鴨の賛
わいしあ女のはるか光
いんこのけも雲霧と神け
雲捲くふく西の甲る光

とくしんおのむすねの位六位
神勇印の在り小刀光
傘の印の垣のくまをゆく
山吸ゆく障のゆきし
負けけしむのむすね裸の
梅澤七、喜西、光
其日の一、三、行の雑巾
光

ウ
くまのむすねのねた堂 光
酔うわくくまの寒の師走も
湯をくまのむすねの病ひ光
のむすね別れく猫の兄弟、
君の代の魚屋所、魚の町
わのむすねこれ潤、潤、

歌僊

白雲の指ささるる空津の山	蕭山
夏強るてふあえ駕の月	春來
世同らるる柏漬のふあをく	太淵
わさりのこふねはる難中	帶路
とあはれのまらふもこ三日	百潭
けあめりく船ふんはく	翠岬

つとよきよ 勢作の 経路より 在義
まはきれ 加茂の 野衣 剛
ほく 子と 有る 代も あり 才 来
地 希の 年と けり の けり 抱 潭
あまの 心と 見し 如 石 屋 小 雲 の 松 路
唯 一 十 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百
酒 喫 の 息 と 遠く 引 せ 笑 ひ 峨 来
わ ぬ 福 と さ くら ぬ 妹 くり 義

廻りて さいわいなる こと なる 撞 潭
の 心 なる こと なる 峨 来
月 日 星 鳥 虫 の 家 なる け ぬ くる 路
ま なる こと なる こと なる 剛 来
十 原 流 なる こと なる こと なる 来
朱 の 鳥 居 なる こと なる こと なる 解 来
病 なる こと なる こと なる こと なる 剛 来
清 子 の こと なる こと なる こと なる 飯 時 の 勢 路

提花の襪の裏の眼を張る道 峨
とらぬの鎌の底を切ら 潭
雲霞の片を寄る珍坊と 義
馬の樂をそけりかき 測
蘭氣の襟の色をかく目の月 潭
くも鎌倉の河新柳の影の 才
人さす子硯の行きのあはれ 路
柳をさすふ南窓のゆり 峨

目くくくくりのあゝ衣服物 才
窓を下りて不を餅を焼く 潭
誰ささささ仮橋ふささ 峨
あさささささささささ 路
ひも花のふさささのふさ 義
針あささささささささ 靴華

お仙

岩城

紫塵

月お從女のお見さし小町島
 朽く馬の花のまつりも 春来
 腐れつゝ鏡も紅葉の道さひく 幸也
 啼と川のわささゆめりり 百庵
 うも麻の醸す煙わささり ぬ雲
 吟しつゝ又古き待と遠む 百太

本州の津の... 鷗... 太
淡合谷の... 洋... 件
よの... 庚申待の雨... 庵
さ... ぬ... 板... 才
貝... の... 見... 別... 名... の丸... 也
銅... の... 船... 住... 吉... 太
宵... の... 月... の... 秋... 給... 件
... の... 庵... かん... 堂

令相の青... 小... の... 太
二本道具の... 長... 庵
杖の... 心... 庵
張... 備... 光... 謙... 柄... 也
細... の... 朝... 鈴... 庵
元月十日... 日... 件

題 松泉寺

大寺の回廊よきふ牛もぬ
 釣かゝる西の菰ほりゝゝよ
 日とわさふさか梅たくららん
 古き杉戸の月探るりりり
 鶺鴒の餌の襟の白きし袖あふ
 卯くく小僧の起る秋の世
 天

序令
 春来
 麥天
 青郊
 渭北

思ひたるくはけし火うきけりし天
なほくさくさのふりきりては
鍋釜も魚介のきりては松浦船
舟のくさくさのきりては
盲子のくさくさのきりては
高田くさくさのきりては風天
くさくさのきりては霜水の月と
くさくさのきりては鐘の音
くさくさのきりては

雨はくさくさのきりては
遠田中くさくさのきりては
岸のくさくさのきりては
遺跡のくさくさのきりては
くさくさのきりては
くさくさのきりては
くさくさのきりては

歌仙

初雪や今宵祝ふのささき

岩翁

休座のけりくは柴火のつら

春来

屋根越えは弦の撥の納り

洞什

腰折るゝやるゝくゝ子也

雅光

焙くあふ曇昏月も白く

采仲

土も雪もいゝいゝつら

執筆

六
光
盤
什
作
川
文
光
知
音
ま

助
天
踏
善
仕
七
孤
先

光
見知新
車の見知新
又似と云やうの花
飲んとま
天地を武りく呵るものい
く下とられぬ晴明、紋光
長ゆるまき
老母草一株
仲

鏡
高年
中
風
又

歌仙

志度の右の腕の山さくく

午寂

戸を佳みーつじ谷の杖

春來

とを深き一重の夏

金井

よりのうらみかきる編

故一

月かぬ月のぬき

禾仲

草みり

升

割れつらし〜腐して芋甲ま
ま〜し〜し〜の〜腐る〜後〜の〜世〜件
か〜し〜者〜元〜か〜癒〜り〜く〜く〜
腹〜し〜し〜し〜し〜し〜し〜し〜ま〜れ〜ま〜
瀧風の一、鳥居の二、三、を居一
ら〜一〜の〜蹟〜の〜あ〜ら〜く〜あ〜あ〜あ〜
尺八のし〜し〜し〜し〜し〜し〜し〜し〜ら
赤子の名〜し〜し〜し〜し〜し〜し〜し〜し〜付〜
井 件 一 井

改えつらし〜腐して芋甲ま
ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜入〜
〜の〜枝〜目〜邪〜と〜腐〜か〜ら〜け〜し〜
大念仏の命〜の〜き〜し〜し〜し〜し〜ま〜
法費の法〜子〜ま〜ゆ〜く〜斗〜る〜也〜
ら〜日〜ん〜ん〜ん〜周〜い〜宿〜と〜致〜件
白ゆ〜ゆ〜何〜と〜思〜し〜し〜拵〜ゆ〜結〜一
不孝から人〜と〜係〜ら〜つ〜身〜の〜井

源氏一冊の源氏一冊なまのこま
地震の中ふらふらまのき一
りこのらふ寺の成る漆件
障子の煙のさむしひまの
まのまのまのまのまのまの
寺のまのまのまのまのまの
らこのまのまのまのまのまの
か科のまのまのまのまのまの

みりも枝珊瑚珠のまのまのま
泉のの鶴のまのまのまのま
まのまのまのまのまのまの
湯のまのまのまのまのまの
所まのまのまのまのまのまの
日まのまのまのまのまのまの

奇仙

駕の屋根さびくゆゝ正印景侍

貞佐

海々使すくく煙に草山

春来

らくらの瓢も夫と流く川音

可容

連くも後乃しこも如也

平砂

海々の海もわく次親馬

才

ゆゝら馬のまゝもれも次

容

四三十一

世の中といふ清き羊頭中
狸の弥陀のわきまは
み飢えて愚小見ゆか
年くく学く海馬の
河東くすくろ方と奥相換
身の中ゆく針の子乃行
人くく毒く知く風仙花
物くけくく月の中川

りの頰のくく時と信く事
君く呼くく介はくく能
字盛く携く車の花見く
憎くく蜂のくくあり
回の親はの田螺もか
汁浣くくみ皆勝くく
香袴細とけくく釘
我な鳩の腹冷くく共

子心白樂天とてしつゝ
伏箱はきさ裏のしつゝ
川ももあまの光りつゝ
やまの光りつゝ死
海も雨もつゝつゝ
泡もつゝつゝつゝ
月ひら待もつゝつゝ
起つゝつゝつゝつゝ

容 砂 容 砂 容 砂 容 砂

後ウのあつとつゝつゝ
木舞とつゝつゝつゝ
水も日も地もつゝつゝ
空も餅ももつゝつゝ
花瓶もつゝつゝつゝ
わつゝの仕もつゝつゝ

容 砂 容 砂 容 砂 容 砂

駿河のうまき
に都のうまき
日輪のうまき
く
道のうまき

魚のうまき

紅葉のうまき
のうまき
取のうまき
錫のうまき
節のうまき
枝のうまき
玉玉子
春来
蝦定子
柔伴
社蔵
執事

錦金へみり〜さつり〜とゆえ
宙〜とく字と宙〜とけ取
腰の物蹴〜とつ〜と戴く
ゆ〜とつ取と五〜と次
食傷ふ〜とつ〜と醫者の爰
一寸降〜と雲つ将袋米
ま何の吉〜と具〜と碓り地
月〜とあ〜とつ〜と奉〜と
定

強力〜と松〜とき名持〜と
和音の〜と糸〜とじ小竹山
吸倦〜とわ〜とつ〜とたの蝶
文〜とま〜とつ〜と編の殺入
〜とけ〜とつ〜と松の介〜とつ〜と
門徒〜とあ〜とつ〜と法〜と三
返禮〜とつ〜とつ〜とつ〜と
唇〜と見〜とつ〜とつ〜と

曾祖母の戸棚の下に
板の灯籠を
ゆきかき
み
音
ま
宵の月の下に
銅鑿

う
法親王の
ま
眼
ま
清い

加世舞

春雨のしづかしく油貝
 入江の園はも桜花さく
 まる暮ぬ三里の松原路まで
 尖ぬいしを人知れぬ
 懐か月の影も静かな車一
 気あつてはしるその角
 来

かきしりある新子船のせうしにま
入相晴きくく一日のまづ一
巴う右の武まおまのしん師の疾
とまきおしーくも庫裏の鉞ま
ぬあある仲の小嶋の世際くわ
出肥り新司のくまを十月一
暁燭のふもくまおまのひま
湯佐離の歌のりみまぬる一

あかしてあまのくまをまはま
うけねばくくま痛のつゆ一
月の雲まの朝顔の逢くともま
ままの谷のくまのきり曲一
神の袖のまままのままま
ままの戸のまままのまま
行はれる部をままのままま
廻りまのまま燼もぬまま

行りらるる糸風の花をさすまらるる
月とさあつ井の肩より拭
喫し見しお織と雲の穂とく
小と物とつらふとさるる糸
赤の飯炊きしとく塗出
町とくさるるして風乃森
濂漉信乃の波替らる音の月
葉はくくくくく角力とすら
同 造 来 造 来 同 造 来

ワ
行りらるる西此冷くの口乃瓶
又一盛酒乃とくさるる
狭きれく漉下るる帆舟
花の高根くくくく雨や
さるるさるるさるるさるる
帯のさるるさるるさるる
同 造 来 造 来 同 造 来

奇仙 蛭河 眺望

旅花をこぼしたのこころ現け

一峰

春來 春來 春來

閑左 閑左 閑左

南花 南花 南花

友以 友以 友以

柔仲 柔仲 柔仲

410

411

朝方の宿枝崎にしてぬるのこ
麻疹とゆへ淡の裏町
まねはふ女尻お足駄とてせら
まどろししり奥のりぢ
霜ゆけのぬき柑子とて
音とくはしり祥頌のまき
四斗樽の清きまきとて汲とく
その朝妻とてとてとてとて
以

わくわくして描く導のつとも
お替り雨のよお替り
月お寄りたるも脚けの風班
しりもやしりもをりり
其のよりの武九曜とら巴
朝方の駕しりも
付とてしりも
神とてしりも
花
左
花
左

夏の日のあけつらうの内うらみの新件
かきしとあまねえ船の扉ま
えたつらうの元うらむ成く
わけつらうの太も寒く白妙花
とみまの切ももつらう
片山里の春中つらう月件
木鬼の眼鏡つらうの鼻つらう
活つらうの又たぬ動番の袂左

傘と五重の塔の下中
入谷つらうのつらう
つらうの融け行と雲つらう
葉つらうのつらう
太極つらうのつらう
つらうのつらう

執筆

奇仙

枝もさく葉もさく涼も雨
 待もさく葉もさく涼も雨
 うらや唐の酒屋もさく
 接し吸もさく唐の糸
 枕灯もさく唐の糸
 馬もさく唐の糸

無倫
 養来
 渭北
 東
 亭

くろりめくもくわくくから場枝ま
れおの申しお石山乃糸亭
お糸糸と徑しして御る夕雀か
給しりしれ種ろ腸ま
雨の月流しる泡の上亭
行燈お針の下細の園か
とらよき風りるよ長殿ま
松の尾おくよ鈴環格、

唐瓦台の蓋の工合わははか亭
糸鞋しつる榎のがしく、
千日と梅田も回し山ろくか
とらけれ飯し腕とほくま
覗るる花の鏡のあすま
おらとくきの入行しむる、

